

- 生徒の主体性を育てたい!
- 集団づくりがうまくなりしたい!
- 特別活動の授業のアイデアを広げたい!

そんな先生方に、秀学社の特別活動通信シリーズをお届けします。



練馬区立大泉学園中学校

副校長 藤本 謙一郎

コロナ禍だからこそ特別活動を充実させ、  
生徒の創造力を高め、困難な時代を生き抜く力を  
育てていきましょう!

<これまでの取組をアップデート>

前回は、「小集団を活かす学級活動」についてお話ししました。今回は、クラス全員で考える学級活動(1)学級会について説明させていただきます。

## 1 みんな経験してきています!

まず始めに、中学校の先生方には、生徒が小学校時代にしっかりと学級活動を経験してきていることを知ってもらいたいと思います。小学校では学級は生活の場であるという意識が中学校よりも強く、「私たちの学校生活をどのようにしてよりよくするのか」ということは積極的に話し合っています。ですから、学級活動について、一からすべて指導しなくてはいけないと思うことはありません。さらに、「全員が経験する」ということを大切に、「司会・記録・計時の役割は輪番制で担当してきています。役割がない児童は意見を述べる側として積極的に発言もしています。生徒に「小学校のとき、どんな学級活動をしてきたの?」と聞くところから準備を始めてください。

## 2 何を話し合うのか考える!

次に、どういった議題で話し合うのか、生徒とともに検討しましょう。よくあるのは「意見箱」を教室に設置し、クラスの様子を把握したり、その他の意見を収集したりして議題を検討することです。とにかく学級の生徒の意見をしっかりと吸い上げてください。

意見を集めていくと、まずは問題点が多く挙がるでしょう。「チャイム着席が出来ていない」「授業中の取組がよくない」「クラスの級友の仲が深まっていない」などですね。この時、規律を重視して、「よし、皆で決まりを作ろう!」という目標の学級活動を行いがちです。それもよいのですが、そればかりだと「取り組む楽しさ」が生まれないのであまりお勧めしません。どちらかというと、級友の輪を深めるような議題があるかよいと思います。学級活動の楽しさを生徒だけでなく先生方にも味わって欲しいと思います。



## 3

## 出し合おう！比べ合おう！まとめる！

学級会では議題の提案理由を伝え、めあてに向けて話し合います。話し合いの形式としては「出し合おう」「比べ合おう」「まとめる」という形が一般的です。まず、議題に対して多くの意見を出し合ってもらいます。ある程度意見が出たところで、それぞれの意見について新たな意見を求め、整理していきます。「似たような意見はないか」「実は同じである意見はないか」「ほかに意見はないか」といった視点で整理をしていきます。そして、全体として意見をまとめます。賛成意見や反対意見だけでなく、合わせるとよい意見も学級全体で話し合っていきます。このあたりの話し合いで大切になってくるのが、議題の提案理由とめあてです。つい多数決で決めたくなるかもしれませんが、何のために話し合っているのかという視点を忘れないで、全員が話し合っているのが大切です。納得するように合意形成していくことが大切です。たった一人の意見でも尊重しようとして生徒全員が考えていくことが、安心・安全な学級づくりとしてもとても重要なこととなります。



## 4

## 感動の生まれる特別活動！

学級会の結果、取り組む活動が決まります。「レクをする」「決まりを作り、それを守って行動する」など、事後の活動が発生します。その活動はしっかり取り組ませましょう。生徒は「自分たちが決めたことだから、しっかりとやろう」と責任をもって行動してくれます。司会などの役割がなかった生徒も協力して取り組んでくれます。きっと「生徒はこんなにも自主的に取り組むのか」と驚かれる先生方もいらっしゃると思います。教科の授業ではなかなか見られない姿もあります。感動が生まれる場面です。全ての生徒には力があり、それは本当に素晴らしいものです。時には学級会でも感動は生まれます。平成三十年に全日本中学校特別活動研究会東京大会で学級活動を公開した際、「こんなにも生徒が積極的に話し合ってますね」と涙された先生がいらっしゃいました。私たち教員は生徒の自主性や主体性を伸ばしたいと願って仕事に従事していると思います。特別活動にはその要素がふんだんに含まれています。ぜひ特別活動の「なすこと」によって学ぶ」を具現化し、生徒のもっている能力を表面化させて、生き生きとした学校生活を送らせる教育を施していきましょう。

## 最後に

コロナ禍で人と人とが関わる活動が制限されてしまう中、だからこそ「特別活動の重要性」を常に感じます。先日、保健給食委員会を担当する養護教諭が「なすことによって学ぶ」を意識して「換気を促すPR活動」を生徒主体で取り組ませたところ、生徒の有能性を感じて大変驚いていました。日々の忙しさについて「教師が自分でやってしまう」ことが多々あるとは思いますが、「生徒を主体にした学級活動・生徒会活動・学校行事」を丁寧に行うことで生徒は育ち、「次世代の育成」が可能になるのだと思います。拙い記事でしたが、第3回まで読んでいただき、ありがとうございました。

